
セイレーンの歌が聞こえたら

森乃やまね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイレーンの歌が聞こえたら

【Nコード】

N5064W

【作者名】

森乃やまね

【あらすじ】

オールジャンルの短篇集。

テーマは「異なるモノ」

オンライン小説ネットワーク「のべぷろ」に一部掲載中。

「森乃やまねのちょこつとブログ」に一部掲載中。

序章——真夜中のリフ（前書き）

イラストは常時募集中。

「投稿」もこっそり受付中。

貴方がふと、「…怖いな」と思ったもの、教えてください。

序章——真夜中のリフ

平凡で穏やかに過ごす毎日。それがあたりまえ、と過ごしていませんか？

同じ繰り返しの日々。単調な毎日。

何か刺激が欲しい今日この頃。

ワンランク上の生活を夢みていたり。

ホントはもっと強烈な刺激が欲しい、生きている手応えが欲しい——なんてね。

まず「平凡」ありき。プラス「非凡」な何かも欲しいという贅沢。

実はその「平凡」はとても危ういバランスの上に成立しているのをご存知ですか。

それは空気と同じ、あってあたりまえのもの。

失くしてしまつて初めてその大切さに気づくのです。

やっと気づいた時には手遅れ。もう、遅いのです。

「平凡」：全ての人に望まれている嫌われ者。退屈でとても脆いもの。

その「平凡」で退屈な日常の中に潜む異なる世界。

時々顔をのぞかせ、ぎよつとさせられます。

「不安」「鬱」「不条理」「夢」「精神崩壊」「バイオレンス」。

「心霊現象」「超常現象」「スピリチュアル」。

「悪夢のような喜劇」「お題消化」その他エトセトラ。

ひとりひとりの泣き笑い。

すべてのテーマを幅広く扱っています。

貴方の波長と私の波長が合う一編があったら幸いです。

テーマは「異なるもの」。

——缶入りドロップを掌に落とした時——

色とりどりのドロップに混じって出てくる真っ黒なドロップ。
そんな一編の集合体です。

序章——真夜中のリフ（後書き）

この短篇集の全て、あるいは一部は予告なく削除される場合があります。

永遠の少女（前書き）

止まってしまった幸せな時の記憶

毎日過ごしている平凡な日々。

過ごしているときは

それが幸せな時間だとはと気づかなくて…

ここにいる私は誰？

永遠の少女

> i 3 1 3 0 9 — 3 9 7 4 <

イラスト提供…楠山歳幸様

ふと目がさめると日が高く昇っていた。

「…もう、今日はみかちゃんと遊ぶから早く起こしてって頼んだのに…」

私はぶつぶついいながら、ベッドから起き上がった。10時過ぎているのにおかあさんはいない。おかしいな。おかあさん、黙って家を開けたりしないのに。キッチンテーブルにいつも置いてあるメモもない。

「おかーさーん」

おかあさんを家じゅう捜し回る。お天気の良い日曜日。トイレにもお風呂場にも物干し台にもおかあさんはいない。私のおかあさんはキレイ好きだからいつもなら忙しくお掃除している時間なのに。こんな風にばたばた走りまわったら怒られるのに。

家の中はがらんとして、見知ったはずの家がまるで知らない家みたい。おかあさん、どこいったんだろう？

ガラリ、と玄関の開く音がした。

「おかあさん、どこいったの？」

あわてて玄関に走っていくと知らないよぼよぼのおじいさんが立っていた。

「香織…」

私の名を呼んでしわくちやのしわの中にある目が嬉しそうに笑った。私は怖くなった。だって知らないおじいさんが私の名を呼んで笑ってる。学校で言われた。「知らない人に声をかけられたら大声で助けを呼びましょう」。

すぐく怖かったので声は出なかったけど、全速力でダッシュしておじいさんから逃げた。手をつかまれそうになったけど、ふりきって家を飛び出した。

先生は言っていた。最近「ヘンシツシヤ」が多いから気をつけるように、って。交番を目指して走る。

——怖い、イヤだ。

それにしても身体がおかしい。なんかだるくってうまく前に進まない。かけっこは得意なのに。すぐに息が切れた。身体の中に綿がつまっているみたい。

おまわりさんを見つけた。

「あの、おうちの中にへんな人がいるんです。助けてください」

しゃがれた変な声。私の声じゃないみたい。やっぱり風邪ひいたん

だ。体もだるいし。おかあさんにりんごむいてもらわなきゃ。

おまわりさんはちょっと困った顔をして、

「じゃ、僕が確かめるから一緒に帰りましょう」

といった。しかたなく私はおまわりさんのあとをついて自分のうちに帰った。きっとあのへんなおじいさんを追い払ってくれるよね。

おまわりさんと一緒に小さな道を歩く。紫陽花のお花がお水をもらってキラキラしてる。こんな道、あったかな？お花が大好きなおかあさんにあとで教えてあげよう。

おうちの前におばあちゃんが立っている。おばあちゃんが来てたんだ！よかった。おかあさん、病気になったのかなあ？だから、いくらさがしてもいなかったんだ。

「おばあちゃん、おかあさんがいないの。それにへんなおじいさんが家の中にいるの」

おばあちゃんに駆け寄ると、おまわりさんと同じようにちょっと困った、悲しそうな顔をした。

「じゃ、おばあちゃん、確かに届けましたよ」

「いつも、いつもすみません。ご迷惑をかけまして」

おばあちゃんがおまわりさんにペコペコあやまっている。へんなおじいさんが悪いんだから、おばあちゃんがあやまる事ないのに。私

はじろっとおじいさんをにらんだ。

「さあ、家に戻りましょう」

おばあちゃんはそういつて玄関を開けた。知らないおじいさんも一緒に入ってくる。図々しい。おばあちゃん、何か言ってやればいいのに。

おばあちゃんはおぶつだんの前に座っていつものようにろうそくとお線香をあげて手を合わせておがんだ。新しいはいがある。

小坂光郎。

小坂秋子。

——私のおとうさんとおかあさんの名前：

私はわけがわからなくなった。おかあさん、死んじゃったの？ いつ？ なんで？ 記憶があやふやで頭がぐるぐるする。ふと私の首に迷子札がかかっているのに気付く。「春日香織」。住所も電話番号も名前もあってるけど、名字が違う。私は「小坂香織」。

その迷子札をつかんでる自分の手を見てぎょつとする。しわくちゃでしみだらけの汚い手。昨日みかちゃんどこっそりおかあさんのピンのマニキュア塗った手じゃない。

「お父さん、そろそろお母さん、ホームに任せた方がいいんじゃない？」

おばあちゃんが知らないおじいさんと話してる。

「いや、私が面倒を見るよ。そろそろ家事も覚えてきたし、百合は自分の家族の心配を申し」

「だからってこんな事が続くんじゃない、お父さんの方が参っちゃうわよ」

「悪いね、百合。何度も呼びだして。私の顔はもう思い出せないみたいで」

「いくら私がお母さん似だからって、お父さんの顔を忘れちゃうなんてね」

「いや、年をとるってそんなもんだよ」

不安で頭がぐるぐるする。おばあちゃんとこのおじいちゃんは知りあいたい。なんか怖いこと話してる。

おばあちゃんが私を振り向き言った。

「じゃ、私は帰るね。『おかあさん』」

私が「おかあさん」。

「おばあちゃん」の「おかあさん」。

ゆっくりと後ろの姿身を見る。

そこに映ったのは腰の曲がっている老婆。

悲鳴が口から洩れる。

しわがれた老婆の絶叫だった。

永遠の少女（後書き）

この短篇集の全て、あるいは一部は予告なく削除される場合があります。

初恋の彼に会ったら…

(前書き)

——でも私はときめかない

初恋の彼に会ったら…

> i 3 1 3 0 1 — 3 9 7 4 <

イラスト提供…天甲斐エコ様

午後の光が降り注ぐ明るいカフェのラウンジで友人が私に語りかけます。

「初恋の彼と街でばったりと会ったらさ」

「やっぱさ、ときめくよね」と嬉しそうに私の友人は言うのです。でも私はときめかない。そのきもちがわからない。

だから久しぶりに街角で合った彼が、懐かしそうに話しかけてきた時。

私は彼を認識したけど、「ときめき」は感じなかったのです。

彼はちよつと寂しそうな笑顔を浮かべて「またね」と言って去っていきました。

だって、しかたない。

二十歳を迎えた日に、私の肉体は交通事故でロストしてしまったから。

悲しみにくれた両親が、財をつぎ込み複製した人造人間が今の私。金属とICチップでできた頭脳は優秀だけど、過去の記憶は欠落し感情もないのです。

彼に会って学生時代のアルバムと日記帳を探し出し、「人間だった頃の私のきもち」を初めて知りました。

ところどころ涙で文字が滲んだ日記帳。

辛い恋心が綴られていました。

でも、今の私には「心」も「涙」もないのです。

こんな時に人は泣くんですね…

記憶と概念はインプットしたけれども。

泣けないのは幸せなのか不幸なのか。

感情がない私にはそれはよくわかりません。

ただ少しだけ「うらやましい」というきもちが理解できるような気がしました。

初恋の彼に会ったら…

(後書き)

この短篇集の全て、あるいは一部は予告なく削除される場合があります。

「ありがとう」と、鈴木さんは言った（前書き）

泣かないで。僕の大切な鈴木さん。

「ありがとう」と、鈴木さんは言った

> i 3 1 3 0 7 — 3 9 7 4 <

イラスト提供…楠山歳幸様

「ありがとう」と、鈴木さんは言った。

「いや、無我夢中だったから。お礼なんて…」と僕は照れて言った。

——言っただけだった。

よく見ると華奢な彼女の肩が震え、泣いている。綺麗な陶磁器のような白い肌のところが汚れている。僕のためにおしゃれしてくれて白いワンピースに染みが付いている…

赤黒い染みでせつかくのワンピースがだいなしだ。…血のように赤い染み。

彼女が泣きながら抱きしめているのは僕。左折禁止で突っ込んできたバイクからカッコよく救ったはずだった。——はずだったのに…

僕は彼女と死んだ僕を見下ろしている。

「初デートがだいなしだ…」

ふと、気付く。初デートではなく、僕の人生がだいなしになったことに。

$$\begin{array}{r} \vee \\ i \\ 3 \\ 1 \\ 3 \\ 0 \\ 8 \\ | \\ 3 \\ 9 \\ 7 \\ 4 \\ \wedge \end{array}$$

「ありがとう」と、鈴木さんは言った（後書き）

この短篇集の全て、あるいは一部は予告なく削除される場合があります。

「ピカレスク誕生」もしくは「正気ではいられない」(前書き)

その時爆発音がした。そして――

「ピカレスク誕生」もしくは「正気ではられない」

> i 3 1 3 1 1 — 3 9 7 4 <

イラスト提供…瀬見堂準様

その時爆発音がした。

衝撃が体中を揺るがし、振動がビリビリと体中を駆け抜ける。

たまりにたまった怒り、不満が爆発し、はじけ飛ぶ。

爆発したのは自分の心の中。壊れてはいけない何かが砕け散った。

もうもうと立ち昇る真っ白な粉塵の中に俺は立ち尽くす。

バラバラと粉碎された断片が降り注ぐ。

それは消し飛んでしまった俺の良心、倫理観。

俺が人間だった時のくだらない欠片。

「人として」と刷り込まれたくだらないしがらみ。

こいつらのおかげで俺の人生がどんなに息苦しかったか。

俺は今日から自分の思いのままに生きる。

もうなにも俺を縛る物はない。

もう人ではない俺の人生が、今、始まった。

「ピカレスク誕生」もしくは「正気ではられない」（後書き）

「良心」「道徳」を振り切ったピカレスク誕生の瞬間です。

バイオレンスと怒りに満ちた「ピカレスク」（悪漢）を瀬見堂準さんに描いていただきました。幸せに荒ぶっています。

この短篇集の全て、あるいは一部は予告なく削除される場合があります。

犬猫セット198000（イチキュッパ）（前書き）

本日の目玉商品は「犬猫セット♪とってもお買い得！」

——定価19万8千円！

先着一名様限り！

犬猫セット198000（イチキュッパ）

> i 3 3 2 8 7 — 3 9 7 4 <

イラスト提供…楠山歳幸様

いつも覗いている小さなペットショップ。

5番ケージに私のお気に入り、のゴールデンレトリバーがいる。生まれたてで小さくて、ふわふわでつやつやの飴色の毛。くりくりのまあるいふたつの瞳で私を見つけると、もげそうな勢いでしっぽをふってかけつけてくる。いつも元気いっぱい、の嬉しそうな顔。でもなかなか賢そうで、きつと大きくなったら私を守る立派なナイトになるだろう。今は私にお買いあげされる日をじっと待っている。

毎日覗くことにしているんだけど、このこのケージは下の方にあるから、お客が多い日はよく見えない時がある。このこのペットショップはわりかし人気があるらしく、いつも人が多い。そんな日はとても残念。私の伸びきらなかつた身長もとても残念。

このこのペットショップには店員がいない。すべて自動販売機形式になっている。ケージが0番から20番まであって、入金してボタンを押すと、指定されたケージが開く。

血統書や飼い方のマニュアルも同時にプリントアウトされ、領収書が発行される仕掛け。要するにラーメン屋の自動販売機がちよっと進化したような、そんな感じ。

私はこのレトリバーが欲しくて欲しくてたまらない。でも、血統書付きらしくというわけか30万もする。コツコツバイトをしてお金を貯めているけど、こんなことしてたら、小犬の一番かわいい時

期があつという間に終わっちゃう。で、私は最近焦っている。

今日はなぜか用事があつて私はとても急いでいた。大切な用事なのにすっかり忘れていて、どんなに急いでも遅刻決定。その大切な用は何かは忘れた。けど、とにかく急がなくてはならなくて、私はずつと駆け足。

でも、ペットショップをチェックするのは忘れない。私の可愛いレトリバー、ジョン・J。（ちゃんと名前もつけている）

本日を目玉商品は「犬猫セット♪」とお買い得！
——定価19万8千円。

ショップのトップの0番・特価ケージに2匹ぎゅうぎゅうに押し込まれている。

茶色の毛糸玉みたいな小犬が、ケージの中から私めがけて体当するように何度もアタックしている。ふかふかしてくるくるの小さなトイプードル。ちよつとも落ち着かなくてそわそわ。視線もキョロキョロ。それがすごく可愛い。ぎゅつと抱きしめたらばたばた暴れた後、観念してしかたなく私のほっぺをペロペロしてくれるだろう。

その奥にはまっしろな猫が迷惑そうに寝そべっている。醒めた目をして興味なさそうに、私を眺めている。ブルーの冷やかな瞳。ツーンとした媚びない態度。エレガントな「お姫様猫」。何度もお願いして、お願いして、やつとちよっぴりだけ撫でさせてもらえる。そして私にしか撫でさせない。このことを撫でるのは私だけの特権。

そして驚いたことに特価セットには

「おまけとして5番ケージのレトリバーもプレゼント！」と追記されていた。

——私の大好きなジョン・Jが「おまけ」にされてしまったことは心外だけど……。なんて素敵な抱き合わせ販売なんだろう。19万8千円で、私のナイト、ジョン・Jとふわふわくるくるの茶色のトイプードルととびきりお洒落でエレガントな白猫が手に入る。なんて、ラッキーな日なの？

でも、私はとても急いでいて、犬連れで目的地に行くわけにはいかない。約束を破るわけにもいかない。そしてすでにだいぶ遅れている。おまけに、残念なことに現金を持ちあわせていない。自販機なのでカードは使えない。

——お願いだから、用事をすませて戻ってくるまで売れないでいてね。

今日はもう、あとわずかしなくて。明日になったら値も変わってしまう。こうなったらさっさと用事を済ませて買いに戻るしかない。幸いにここは24時間営業なので、「売れない」方向にかけるしかない。犬猫まとめて3匹お買い上げするものは好きは多分私ぐらい。……だとしても、ひどく不安で……

めめしく3度ほど振り返り、心を決めて目的地に向かって走りだす。早く戻ってこないとせっかくのチャンスがフイになる。

——急げ、急げ、急げ。

私はソファアーの上でうとうと思いにふける。

来月の強化合宿の参加費は2万5千円。参加部員は8人いるからぴったり20万が机の引き出しの中に入っている。今日中に払い込みに行つて宿を確保しないといけないんだけれど…。

これをちよつと拝借すればあのトイプードルと白猫とジョン・Jが手に入る。

問題は、そのお金をどうやって私の夢の中に持ち込むかだ。

あの引き出しの中にある20万を夢の中に持ち込めたら…。団地住まいの私は、夢の中では2頭の犬と1匹の猫の飼い主になれる。初めて犬のリードを引いて私の犬達を私の気が済むまで散歩させる。それも2頭、いっぺんに。犬たちと歩きまわりさんざん疲れたその後には、白猫と毛布の中で一緒に寝ることができる。

ふかふかでつやつやの2頭と1匹の毛を思い切り撫で回し、心ゆくまで私のかわいい達を堪能できる。誰にも気兼ねなく、私の気の済むまで。私だけのかわいい達をひとりじめ。

雨音と土の湿った匂いが窓から流れこむ。

——ああ、雨が降ってきた…。早く洗濯物を部屋に取り込まないと…。思うだけで、体は重く動かない。動かないどころか、腕も上がらず目も開かない。けだるい初夏の午後。低気圧が低血圧にのしかかり、

体は湿気を吸い込んでずっしりと重い。急がないと銀行が閉店してしまう。午後も遅い。

私はまた、夢の中に戻っていく。いつか私だけのこにするからね。いつか、必ず。

そして、夢の中でも飼うことのできない私のかわいい犬と猫たちに出会いに行く。

夢の中のさらに奥。24時間営業の自販機のペットショップへと。

>i33288—3974<

犬猫セット198000（イチキュッパ）（後書き）

この短篇集の全て、あるいは一部は予告なく削除される場合があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5064w/>

セイレーンの歌が聞こえたら

2011年10月20日18時09分発行